

Title	平成30年度「東北地区西洋古典資料保存講習会」実施報告
Author(s)	鈴木, 宏子; 篠田, 飛鳥; 山下, 泰史
Citation	一橋大学社会科学古典資料センター年報, 39: 24-29
Issue Date	2019-03-29
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/30236
Right	

平成 30 年度「東北地区西洋古典資料保存講習会」実施報告

Report on the Course for librarians on Conservation of Western Historical Materials in Tohoku district

鈴木 宏子 ・ 篠田 飛鳥 ・ 山下 泰史

SUZUKI Hiroko, SHINODA Asuka and YAMASHITA Yoshifumi

1 はじめに

2018年11月16日(金)に、東北大学附属図書館を会場に西洋古典資料保存講習会を、同大学附属図書館と共催で開催した。社会科学古典資料センター(以下、センター)では、30年以上の歴史を持つ「西洋社会科学古典資料講習会」や20年近く継続する「西洋古典資料保存講習会」を長く国立キャンパスで実施してきた。本報告では、センターによる初めての地域講習会の開催報告をするとともに、この講習会のきっかけとなった「西洋古典資料保存のための拠点およびネットワーク形成事業」の成果について振り返ることとしたい。

2 「西洋古典資料保存のための拠点およびネットワーク形成事業」¹

本事業は、文部科学省共通政策課題として概算要求の採択を受け、平成28-30年度の3年間、センターと附属図書館が協働で実施してきた事業である。西洋古典資料保存のために、人材育成とその人材を基にした拠点形成、ネットワーク形成を目的とする。事業の柱は、全国の大学図書館の保存のための人材育成である。保存に関する知識及びセンターの保存修復工房で実施している保存修復技術、ノウハウをOJTで1ヶ月程度学んでもらい、その知識と技術をそれぞれの大学に持ち帰って共有あるいは指導する、更には、地域でも知識の伝搬に努める、というものである。

本事業中の3年間に実務研修に参加した大学等は、9機関におよび、9名の研修生の参加を得た。地域は、北海道1、東北1、関西2、中国四国1、九州1、東京3である。機関種別は、国立大学7、私立大学1、国立国会図書館1であった。全国各地域の人材育成の底上げを狙っていたため、ちょうど良い具合に、全国各地に分散して研修生を得ることが出来た。3年間という時限の事業であり、ほぼマンツーマンの研修体制のため、多くの研修生を受け入れるのは不可能と考えれば、次に構想するのは、これらの研修生を足がかりに、各地域での研修を広めたいということである。このような背景から、今回の東北地区西洋古典資料保存講習会の企画に繋がった。

¹ 一橋大学社会科学古典資料センター.”「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」とは”.一橋大学社会科学古典資料センター. <http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/training.html>. (参照2019-01-23).

3 東北大学附属図書館，東北地区大学図書館協議会との連携

一橋大学では、本事業の成果の一つとして地域での講習会を構想していた。上述のように、実務研修生の数は限られており、多くの図書館職員に行きわたるためには、実務研修生の大学図書館と連携して、その地域の大学図書館等の職員向けの講習会を順次開催することで、全国の底上げを進めていきたいという考えであった。一方、東北大学附属図書館では、一橋大学の実務研修に参加した菊地良直貴重書係長が本事業の成果を発揮して西洋古典資料の展示（東北大学附属図書館平成30年度企画展「西洋古典への扉」²）を企画していた。それに合わせて、保存のための地域講習会を開催すれば、地域の大学図書館にも有益であり集客にも効果的であろうということで、双方の希望が一致し開催が実現した。開催にあたっては、東北大学附属図書館だけでなく、東北地区大学図書館協議会（研修部会）の協力をいただき、東北地区大学図書館職員を対象とした地域研修会として実施することができた。

4 講習会のプログラム作成

講習会プログラムは以下の通りである。プログラムは東北大学附属図書館が原案を作成した。プログラムは昼休みを挟み、11:30～17:00と、やや変則的な時間割とした。これは受講対象者が東北地区大学図書館職員と広範に亘るため、遠方からでも前泊することなく日帰りが可能な時間を設定したためである。

講習パートについては、まず一橋大学が「西洋古典資料保存のための拠点およびネットワーク形成事業」について概要を説明し、その後東北大学より東北大学附属図書館における保存の実態と課題についてお話しいただいた。続く講義・実演では、センター保存修復工房スタッフから、東北大学附属図書館に挙げていただいた課題への対応を実演も交えつつ紹介した。実演とするか実習とするかは検討どころであったが、実習とすると講師の人数によって受講者数が限られてしまうので、今回はより多くの方に受講していただくため、また準備の簡便化のために実演とした。各プログラムの詳細は第6項にて記す。

講習会プログラム

11:10-11:30		受付	
11:30-11:35		開会挨拶	東北大学附属図書館事務部長 加藤 晃一
11:35-11:50	① 講習	概要説明：西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業	一橋大学学術・図書部長 鈴木 宏子
11:50-12:30		事例報告：東北大学における古典資料の保存と課題	東北大学附属図書館情報サービス課貴重書係長 菊地 良直
12:30-13:30		休憩	
13:30-15:30		講義・実演：本を残すために一橋大学社会科学古典資料センター保存修復工房の取組	一橋大学 学術・図書部 山下 泰史 社会科学古典資料センター保存修復工房 篠田 飛鳥
15:30-15:45		休憩	
15:50-16:50	② 見学	書庫見学 企画展見学	(企画展ギャラリートーク) 東北大学総合学術博物館助教 小川 知幸
16:55-17:00		閉会	

² 「平成30年度企画展「西洋古典への扉 - The Door into Old and Rare Books」を開催しました。」『木這子』Vol.43, No.3, p.2, 2018.

5 受講者について

青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県と東北地区内の様々な県からの受講者が集まった。加えて、主催である東北大学内の職員の方々にも多数参加いただき、受講者は計43名となった。このことにより、本講習会が、本事業の実施目標の一つである各機関内の職員を対象にセンターと他機関が共同で保存について研修を行う「機関研修」、地域の拠点機関を中心に周辺の希望者を広く募って行う「地域研修」としての役割を十分果たすものとなった。

6 講習会の実施内容

(1) 概要説明「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」

ここでは、一橋大学より本事業の概要を説明することにより、本講習会の背景を理解してもらうことを意図した。具体的には、本事業で実施してきたマネジメント人材育成を視野に入れた実務研修のこと、加えて貴重資料は、「国立大学図書館協会ビジョン2020」³の中でも希少性が高く管理責任が大きい資料として定義されていること等を説明した。さらに全国各地にある西洋古典資料の保存の底上げのためにはネットワークが重要であることを強調した。



鈴木一橋大学学術・図書部長による概要説明

(2) 事例報告「東北大学における古典資料の保存と課題」

次に東北大学附属図書館情報サービス課貴重書係長による事例報告が行われた。こちらは一橋大学で準備したコンテンツではないため、我々も講義を拝聴した。貴重書係の日常業務から分析した貴重書の利用の種類と損傷要因といった各館に当てはまる内容から、東北大学附属図書館の保存体制にかかる改組や保存施策、今後取るべき対策といった個別事例まで幅広くお話しいただいた。非常に具体でわかりやすく、示唆に富む内容で、密度の高い講義であった。

(3) 講義・実演「本を残すために 一橋大学社会科学古典資料センター保存修復工房の取り組み」

午後からは講義と実演を交えて、センター保存修復工房の取り組みを紹介した。事前に東北大学から提案して頂いた案を元に全体の内容を検討し、その講義内容と37ページにわたるテキストのほとんどすべては保存修復工房スタッフが作成した。講義は大きく「修復作業」「保存環境・資料運用」「本学内他機関との連携」の3部からなり、特別な理由がない限り現物にはなるべく手を加えない「予防的保存」を行う為に必要な事を、保存修復工房のこれまでの取り組みに沿って紹介する内容となった。保存修復工房にとっても今回の講習会に携わり、今までの活動を発表する場を得たことは、とても意義深い貴重な機会であった。講義の際に使用し

3 国立大学図書館協会. "国立大学図書館の機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2020～". 国立大学図書館協会. <https://www.janul.jp/ja/organization/vision2020>. (参照 2019-01-23).

たスライド及び配布資料はセンターウェブサイト⁴に掲載されているため、その内容についてはここから確認していただきたい。

本講義に於ける特徴的な点として、「知識」だけでなく「モノ」も持ち帰っていただくため配布資料に工夫を凝らしたことで、保存容器を実際に手に取り見て頂ける展示コーナーを設けたことなどが挙げられる。展示コーナーでは工房内で作製している代表的な容器類などを会場内に展示し、講義前後に多数の受講生にご覧いただいた。また、配布資料を「ステープラ綴じ」ではなく実際に修復で行う「糸綴じ」としたことで、配布資料を収納することが出来る封筒フォルダを受講者に配布したことも資料保存を具体的に感じていただく為の企画であった。特に封筒フォルダに関しては、中性紙の封筒と AF ハードボードを修復工房であらかじめ加工したものを配布し、実演の最後に見本を示しながら各受講者に実際に貼付してもらった。「モノ」を持ち帰っていただければ、各受講者が自館で内容を共有する際の手助けとなるためである。

また、東北大学附属図書館の協力により、ビデオカメラを用いて手元の実演の様子をその場で正面の大型スクリーンに投影することができた。おかげで受講者が実演者の周りに集まらなくても作業の様子をはっきりと見ることができるようになった。これにより、実際の作業を実習に近い形で体感してもらうことができた。

実習を伴う研修会では、どうしても限られた受講者数しか受け入れできないことが悩みであったが、手元の作業をスクリーンに投影したり、“二つのパーツを貼り合わせるという”簡単な作業ではあるが実際の成果物としての保存容器を持ち帰ってもらう等の工夫により、多くの参加者に保存対策の具体的なイメージを持ってもらうことができたと思われる。一橋大学で行っている他の講習会にも採用できる手法であるため、今後検討したい。



展示コーナーの様子



社会科学古典資料センター
保存修復工房 篠田による講義



ビデオカメラによる投影の様子

⁴ 一橋大学社会科学古典資料センター. "修復工房". 社会科学古典資料センター. <http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/preservation/index.html>. (参照 2019-01-23).

(4) 見学等

一橋大学による講義のあとは、受講者を2班に分けて東北大学附属図書館の書庫見学と同日開催していた平成30年度東北大学附属図書館企画展「西洋古典への扉」のギャラリートークを行った。東北大学附属図書館によるイベントのため、我々も受講者と同様に参加する機会を得た。書庫見学は東北大学附属図書館貴重書係長に、ギャラリートークは東北大学総合学術博物館の教員にご案内いただいた。書庫見学では、現在実施中の西洋古典資料の再整理・再配置作業の様子を見せていただき、普段は立ち入ることのできない東北大学附属図書館の準貴重書庫の中も拝見し、どのような資料がどのように収められているのか、また、どのような工夫がなされているのかを拝聴することができた。ギャラリートークでは書物の歴史についてご説明いただきながら展示を拝見した。パピルスなどを実際に触ることのできるコーナーや映像資料等があり、随所に工夫を感じる非常に楽しい企画展であった。

7 アンケート意見 まとめと成果

講習会受講者数は43名、アンケート回収数は32件だった。

アンケートでは「参加した理由」を自由記述にて回答していただいた。回答を大別すると、「保存修復に興味関心があった」旨の回答がほとんどであった。なかには「現在取り扱いに悩んでいる資料がある」「自館の保存体制が適切か確認したい」といった業務上の課題をもって受講している方も見受けられた。また、アンケートでは、講義時間の長短について「長い」「ちょうどよい」「短い」「わからない」の4つから選択する形で回答していただいた。講義によっては2時間に及ぶものもあったが、アンケートでは「講義時間」は「ちょうどいい」という回答がほとんどで、1件「短い」という回答があった。また、「東北地区で保存修復の講習会を行う場合、参加したいと思いませんか。」という質問には「参加したい」「内容によっては参加したい」と回答した人が約90%に上った。これらのことから、受講者の保存修復に関する意欲がうかがえる。

各講義に対する意見・感想を自由記述にて回答いただいたが、非常に好意的な意見が散見された。「資料を残すために修復をしない」「積極的に手を加えない」「現物の重要性を感じた」旨の保存に対する意識の話や「メーカーや品名を教えてもらえてよかった」「現場レベルでの話を聞くことができた」「東北大学や一橋大学での事例を聞くことができた」旨の具体的な話両方について多くの感想が得られた。また、保存箱等作成の実演についても「実演ありでわかりやすかった」「素晴らしい技術を拝見でき、ちょっと感動した」といった言葉をいただくことができた。他方、「用語について解説がほしかった」「保革作業の実習を試みたかった」旨の意見も頂戴した。

また、講義(1)の本学事業の説明に対しても、「資料保存のマネージャーの育成が必要ということがよくわかった」「人材育成に積極的に取り組む事業は重要」「複数の図書館が繋がりを持つ事が必要」といった事業の意義に共感する意見のほか、今後も継続してほしいという意見があった。

以上、全体的にプラスの意見・感想が多く、受講者にとって実りのある講習会にできたと考えられる。時間割から講義内容まで、東北大学附属図書館が仔細に考えてくださったおかげでここまでスムーズに進み、今後各地域で講習会を行う際のモデルケースになる講習会となった。

8 謝辞および今後に向けて

本講習会の実施と成功には、東北大学附属図書館および東北地区大学図書館協議会の多大なるご協力があった。特に東北大学附属図書館では、一橋大学の事業と意図をご理解いただき、展示会およびその講演会で忙しい中、企画から実施に至るまでご支援をいただいた。改めて感謝申し上げたい。

今年度（平成 30 年度）は、「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」の最終年となっており、最後に目標としていた地域講習会を開催できたことは、本事業の大きな成果となった。東北大学での本講習会は、今後の地域講習会のモデルとなるもので、その最初で好評を得たことは喜ばしいことである。今後もネットワークを土台にして、同様の地域講習会を各地に広げていくことを目指していきたい。そのためには予算はなくとも連携協力により持続可能なものとなるよう企画・運営方法を進めていくことも重要である。世界的コレクションを所蔵する社会科学古典資料センターを持つ一橋大学は、全国の資料保存の底上げとそれに伴う研究の推進に貢献していく使命を持っている。